

二〇二二年七月二三日

河童忌や書架には文庫本ばかり
胎内のごとくくの字に吾子昼寝
対岸に人影揺るるキャンプの火
民宿の手摺りに並ぶ水着かな
炎昼の木陰に憩ふ警備員
摩天楼ビルの狭間に雲の峰

凡士
もとこ
素秀
智恵子
せいじ
せいじ

二〇二二年七月二二日

汗滂沱失せし財布の見つからず
大声に読み上げ算や蝉しぐれ
磨崖仏青葉の影を文様に
コロナ禍にどこか控えめ蝉の声
涼風に窓開け父の体拭く

たか子
凡士
明日香
菜々
なつき

二〇二二年七月二二日

透けし腹ブルーラメめく目高かな
日のめぐみたつぷり梅の干しあがる
凧ぎわたる渚一里を朝散歩
石磴を通せんぼする萩葎
ピカピカの新車に映る雲の峰
車窓いま若布干す浜通過中
片陰や手刀切つて擦れ違い

もとこ
はく子
凡士
ぼんこ
たかを
あひる
隆松

二〇二二年七月二〇日

味深き丹波の土の夏野菜
泡ひとつつ水面に残し源五郎

たか子
智恵子

二〇二二年七月一九日

炎昼やカレーの匂ふ島のカフェ
向日葵の顔を濡らして日照雨過ぐ
水差しに簾越しなる日の揺らぎ
寿老神耳をつんざく蝉時雨
片陰にコロナマスクをずらしけり

なつき
みづき
せいじ
ぼんこ
たか子

二〇二二年七月一八日

梅雨明やひねもす廻る洗濯機
風鈴の乱れ打ちなる観音寺
海風に貝風鈴の機嫌よし
参道の大天蓋は青楓
苔庭へ開けて花頭窓涼し

満天
もとこ
むべ
隆松
菜々

二〇二二年七月一七日

臥す母の背中さすりて明易し
土用波砂のお城を呑み込みぬ
ばち挙げて祭太鼓の揃ひたる
夕焼け背に今日の最後の波に乗る

更紗
智恵子
素秀
凡士

毎日句会みのる選・二〇二二年七月二五日